

田中英道著「芸術国家 日本のかがやきⅢ—室町時代から現代」勉誠出版 2017年4月10日刊を読む

江戸期の充実した教育

1. (1) 一種の道徳法典としてつくられた『武家諸法度』^{ぶけしよはつと}のひとつに、武士の教育の方向性が明記されている。
(2) まず武術修得を行い、平時の芸術にも磨きをかけ、「文武両道」でなければならなかった。
(3) その十三条のうち、節制、日常生活における厳しい道徳、尊敬をうけている長老に助言を求め、思慮深く妻や夫を選ぶことを訴えていた。
(4) 飲酒や自堕落^{じだらく}な生活は国の土台を揺るがしかねないことが指摘されていた。
(5) 「国の安泰は有能な人々、その人たちの誠実と献身に依存している」と書かれたのである。
(6) 時間割は、六つの術、礼儀作法、音楽、書道、数学、弓術、馬術が行われた。
(7) 八歳から『孝経』(経書)と『大学』から始まる漢文の古典を読んだ。
2. (1) 二百六十の藩に分かれたが、二百余校の藩校がつくられた。
(2) たとえば、米沢の藩校での武士教育は次のようであった。
(3) 朝、助教授たちが二回ずつ手を叩くと子供は目を覚まし、顔を洗うと寝室と校庭の掃除をし、授業を受けた。
(4) 儒教の四書を読み、助手たちがそれぞれ二、三人の生徒に個人教育を行い、一時間の読み方と復読を行った。
(5) それから手が叩かれると、やっとな朝食となった。
(6) 朝食ののち、独修の読書がなされ、儒学の本が取り上げられた。その後、武術道場の学校で剣術と馬術を習った。毎日七日は漢詩の授業にあてられ、文法、語法を学んだ。
(7) 学校の中で許さないことは、騒ぐこと、扉を乱暴に閉めること、大声で笑うこと、大声で会話をすること、許可なく外出することなどで、学校の秩序を乱してはならなかった。
(8) こうして十五歳まで学んだ。十五歳で元服するのである。
3. (1) またすべての階層の子弟が行くことができるのが寺院学校であった。
(2) これはふつう、寺子屋といわれるが、その名によりいかにも江戸時代の教育が零細的に行われているかのように考えられる。
(3) しかしこれはもともと寺院附属学校として十二世紀から十五世紀にあった学校の継続であったのである。
(4) 無論、江戸時代になると僧侶養成の学校ではなく、一般の町人の子弟の、読み書きそろばんを教育する「手習所」^{てならいじよ}となった。

4. (1)しかしそれ以上に、歴史や地理も教えられ、武術や儒学も学んだ。
(2)男女とも六歳から八歳で入学し、十二歳まで学んでいた小、中学校であった。
(3)教科書の多くは教師自身によって書かれた。
(4)人気のある教科書(往来物)は百七十回も版を重ねたという(『童子経』『実語経』など)。
(5)この学校の数は江戸時代後期には全国で一万四千校までになった。
(6)江戸だけでも二百九十七校もあったのである。

5. (1)徳川時代の大学は各地に建てられた学問所であった。
(2)林羅山(一五八三～一六五七年)の創設した弘文館はのちに湯島の昌平坂学問所となった。
(3)藩校が各地につくられた。
(4)伊藤仁斎(一六二七～一七〇五年)の創立した古義堂は「古義学」を目指し門弟三千人といわれた。
(5)荻生徂徠(一六六六～一七二八年)は家塾護園を開いている。
(6)彼が唱えた学問「古文辞学」は徹底した原典考察を行い、そのレベルは中国学者以上であったことが知られている。
(7)国家の統治に関与する若者の教育を行おうとしたのである。
(8)熊沢蕃山(一六一九～一六九一年)の『大学或問』では、人格の教育を問うている。
(9)享保八年(一七二四年)に建てられた大坂の懐徳堂は町人学問所で、平明で普遍的な人間認識を説き、その後百四十年余り、関西の「町人の大学」であり続けた。

P110 ~ 111

<コメント>

田中英道先生の「芸術国家日本、第3巻」で紹介された江戸時代の教育。当時、世界でも最高水準の基礎教育が日本で行われたことがよく理解できる。是非、御一読を。

2018年11月19日(月)林明夫記